

住喜代志の戦争

平瀬 礼太

はじめに

住喜代志という名の人物を御存じであろうか。アートの世界に関わりの深い人物であるが、表舞台で華々しく活躍した人ではないので、知っているという方のほうが極めて稀であろう。本稿では、筆者にとっては興味深くとも、ほとんどそのプロフィールが一般に知られていないこの人物について触れてみたい。

住喜代志（すみ きよし）は1901（明治34）年9月17日に生まれたという。幼少期のそれ以外の情報は不明である。旧制斐太中学校（現在の岐阜県立斐太高等学校）に通っていたことが、住の後輩で高山市長となった土川修三により記されている。1919（大正8）年3月に同校を卒業し、その後東京帝国大学に入学した。在学中に東京帝

国大学セツルメントに参加したという記録がある。『近代日本社会運動史人物大事典』（3 すゝは）によると、東京帝国大学セツルメントとは、1923（大正12）年に起きた関東大震災直後に「学生救護団」を結成して罹災者救護活動に当たった東京帝国大学の有志学生・教授たちの協力で設立されたもので、住はその学生セツラーであったとともに、卒業後も支援を続けた「オールドセツラー会員」であったとされている。

ここまででは、美術史を専門とする筆者がなぜ住に関心を寄せるのかはわからないはずである。セツルメント活動の後もしばらく履歴不明の時期が続き、明らかにするのは1930年代後半になってからのこと。昭和の戦争の時代が到来していることが、本稿のポイントである。

洋画家の鶴田吾郎は住のことを記している。1938

(昭和13)年、当時朝日新聞社に勤めていたという住が鶴田を訪ね、従軍画展覧会を開きたいと誘ったという(鶴田『半世紀の素描』)。実際この年に大日本陸軍従軍画家協会が結成されて、「支那事変勃発一週年記念陸軍従軍画展」が夏に東京で開催され、名古屋、大阪、京城と巡回している。鶴田の記述によると、大阪、広島(名古屋の間違いであろうか、それとも広島でも開催されたのかよくわからない)、京城への巡回を住の高校時代の友達が引き受けたというのだが、売り上げを持ち逃げしてしまった。これを機に大日本陸軍従軍画家協会は総会を開き、組織を発展解消して陸軍美術協会となったとされている。住は「これからは協会のために全力を上げて努めます」といったという。

陸軍美術協会

1937年に本格化した中国との交戦により従軍画家が戦地に赴く機会が増加していたが、同年に海洋美術会が結成され、1938年には文部省幹旋による傷痍軍人慰問画寄贈計画、朝日新聞社による戦争美術展開催と、戦争関連の美術事業が次々と企画されていた。大日本陸軍従軍画家協会もこのような動向の中で結成されているが、朝日新聞

社に勤務した住が、戦争を契機にして、朝日新聞主催の戦争美術展(これは古くからの戦を表した美術品などを展示するものであった)と並行する形で、現役作家の戦争美術展を企画することも十分あり得ることであった。

陸軍美術協会は1939年4月14日に陸軍省情報部の賛同を得て結成されている。軍部当局との連絡を密にし、あわせて美術家相互の親睦を図って興亜国策に資することが目的として掲げられた。会長は陸軍大将の松井石根、副会長に洋画壇の重鎮・藤島武二が就いた。設立当初の最大の事業は同協会と朝日新聞社が主催した聖戦美術展覧会の開催であったが、陸軍美術協会と朝日新聞社の協力の接点には住の尽力があったことが推測される。「聖戦」をカンバスに再現するとして東京を皮切りに大阪、名古屋などの大都市で開催されただけでなく、北海道から九州までの地方都市にも巡回し、さらには満州や京城(ソウルの旧称)、台湾まで作品が運ばれた。第2回聖戦美術展も合わせて実に40箇所以上に巡回して各地で多数の観衆を集めた。そして朝日新聞社(地方巡回の場合は地元紙)は関連記事を連日掲載した。このような事業のプロデュースにおいて、新聞社時代に築いたノウハウとコネクションを住が活用した

であろうことは想像に難くない。

陸軍美術協会は、その後の決戦美術展、陸軍美術展などの展覧会開催をはじめ、春秋の靖國神社臨時大祭時に戦没兵士の遺族に配布された『靖國之絵巻』のような出版にも携わっていた。聖戦美術展関連の豪華画集や協会員の従軍記、『南方画信』『北方画信』『大東亜戦争便覧』など美術家が挿画を担当して戦争の状況を知らせるもの、『つはもの日記』『戦友日記』のように軍人勅諭や戦陣訓を掲載し、兵士の日常使用を目的とした発行情物まで同協会が携わっており、住も編集や発行に力を注いだようだ。また、当時の新聞記事を読むと、例えば1940年7月10日には京城の聖戦美術展で川島精動総裁を住が案内したことが記されており（『京城日報』）、9月には前述の鶴田吾郎や洋画家の向井潤吉とともに仙台の聖戦美術展へ赴いたことが記された（『河北新報』）、各地の聖戦美術展に実際に足を運んでいたこともわかる。この時には仙台ブラザー軒において開かれた戦争画を語る放談会に鶴田、向井らと出席し、住が戦争画の値段について語るとい一幕もあった。聖戦美術展における主役は藤田嗣治や向井、鶴田らの画家や、同展に出品した従軍兵士らであったと言えようが、裏方として縁の

下で力を奮ったのが、事務局長、専務理事として活躍した住であった。

さて、陸軍美術協会が中心となって運営した聖戦美術展や決戦美術展、朝日新聞社が主催した大東亜戦争美術展などに多くの戦争美術作品が出品され、各地で展覧された。そして夥しい数の人々がそれらの作品を眼にする機会をもつこととなった。最後に行われた陸軍美術展が東京で実施されたのは1945年4月、巡回の最後となった青森は7月であったことを考えると、ほんとうに戦争終結ぎりぎりまで戦争美術が見られていた、ということに驚かざるを得ない。輸送難が深刻な状況であり、各地で空襲が激化していたことを考えあわせれば、なぜここまで戦争美術を各地に運んで展示していく必要があったのか、疑問に思うのも当然であろうが、様々な理由があるにせよ、住をはじめとする陸軍美術協会の面々の、種々の困難を乗り越えて外地まで作品を運んで展覧するまでのプロモート力に帰する部分もあったはずであろう、と筆者には思われる。

戦争画の回収

終戦後にGHQ（連合国軍総司令部）の指示の下に戦争

画の所在調査が行われたが、軍関係の倉庫や学校、巡回のあった青森、巡回を予定していたソウルなどに散在していたようだ。日本画雑誌『三彩』によると戦争画の所在は、陸軍省構内7点、遊就館4点、陸軍士官学校内13点、予科士官学校内12点、幼年学校内13点、岐阜高山市7点、青森弘前市に23点、熊本市に3点、神田陸軍倉庫に17点、上野美術館に12点、総数121点（内空襲延焼、終戦どさくさで40点は焼失）であり、海軍関係は鎌倉に疎開中であつたという。

ところで、GHQはなぜ戦争画の所在調査をしようとしたのか？ GHQの公文書からは、GHQ、というよりもアメリカが戦争画展示をもくろんでいたことが知られている。そのために、戦争画の第一人者であり、所在にも詳しい藤田嗣治、そして住喜代志に白羽の矢が立てられたのであつた。実際に、終戦からわずか3ヶ月ばかりの1945年11月には藤田を補助する立場として住は戦争画回収に従事していたようだ。1946年2月の終戦連絡中央事務局の文書では藤田及び住が戦争画等蒐集目的を達成したとして検閲・移動の権限を彼らに与える証明書が発行されている。

筆者は戦争画の戦中戦後の行方を調査し、戦後に日本からアメリカへ運ばれてそれが日本に無期限貸与という身分で東京国立近代美術館に収納されるまでの経緯を辿ったことがあるが（『戦争と美術 1937-1945』国書刊行会 を参照のこと）、不思議に思っていたことがあつた。それは戦争画の一部がなぜ巡回展も開催されていない岐阜県の高山市に保管されていたかということであつた。それも、よくよく調べると藤田嗣治の第1回大東亜戦争美術展出品作《シンガポール最後の日（プキ・テマ高地）》（1942年）、戦争美術の中でも最も有名でかつインパクトの強い作品である《アツツ島玉砕》（1943年、決戦美術展）、小磯良平の第2回聖戦美術展出品作で、第1回の帝國芸術院賞を受けた《娘子関を征く》（1941年）、《カリジャティ会見図》（1942年、第1回大東亜戦争美術展）、中村研一《コタ・バル》（1942年、第1回大東亜戦争美術展）、そしてこれも最も印象的な場面を描いた戦争美術作品として有名な宮本三郎《山下、パシバル両司令官会見図》（1942年、第1回大東亜戦争美術展）と、恐らく戦争美術のなかで極めて重要な位置を占める作品ばかりが集まっている。この内容を考えると、それらは19

41年から1943年までに制作され、空襲が激化する時期の1944年頃においては既にフレッシュなニュース的価値はなくなっている（つまり最新の戦局を描いていないために、もつと新しく制作された作品が各地で巡回展示される）ものであるが、戦争美術の歴史を語るうえで欠かせない作品で、あわよくば勝利の暁には戦争博物館？の中心的資料となるべきものであったものと言えるだろう。そうすると、巡回展示には必要ではないこれらの重要物件を空襲から守るために、軍部でも都会でもないために空襲では狙われやすいわけではない高山に疎開させたのではないか、という予想は立てられる。しかしこれは推測ではないか、いろいろな美術関係資料を見てもわからなかったのであるが、最近この時の事情が説明されている資料をようやく見つけることができた。雑誌『飛驒春秋』（第二十三号・第九号 通巻二百四十四号）に所収の「終戦小話（二）」がそれである。高山市長を務めていた土川修三が記したこの文章に、藤田嗣治の戦争画を高山市役所が預かっていたという記述に接して筆者の心は躍った。だいたい次のような経緯で高山が戦争画の隠れ家となったのである（以下筆者要約）。

藤田嗣治の戦争画は土川の前任の森市長の時代に市役所が県庁から預かっていた。戦後に二本助役はこの絵を早く県に返さなければと催促した。そして家具製造業の飛驒産業にベニヤの箱を作ってもらっておいた。突然藤田嗣治とアメリカ将校2名を斐太中学の先輩でかねてからの知り合いの住喜与志が案内してきた。用件は、戦争画をアメリカに送るので至急荷造してくれという将校の命令であった。土川は一名の将校の態度が気に食わなかった。そこに助役が、県の同意が必要と思ひ、荷造箱の話はしていない、と耳打ちした。一芝居打ってやれと、土川は席に戻って、こともなげに「暫しお待ちなさい、完全な荷造をしてあげますよ」と言い放った。住は「そんな急ぐ必要はない、二三日かかってもいい」と心配したが、「結構です」といい、階下の助役室で県に連絡を取り、飛驒産業へ箱を受け取りに職員を走らせて一時間ほど時間をかせぎ、市長室に戻って、「そろそろ荷造箱もできたころですから、どうぞ荷造にお立合いを」と言いながら、市長の威厳を保つためにかけなくてもいいのに、やおら受話器を取り上げた。

暫らくして一同が市長室に戻るやいなや気に食わぬ将校が「日本にきて、こんなに迅速に、また立派な箱を造り上

げられたのには驚いた、又、こんなに完全に、順調に仕事
が運んだのは初めてである。尊敬すべきメイヤーである、
サンキュー」と絶賛してグローブのような手を差し出し
た。

ざまみると溜飲は下がったが、余り威張りすぎて、結局
この有名な戦争画を見損ねた。

上記のような非常に興味深いやりとりがあったというの
である。残念ながらなぜ県庁に戦争画が集められ、それが
市役所に預けられたのか、その経緯に関しては触れられて
いないが、当地出身であった住の関与がなかったとは考え
られない。住が戦争画の疎開地として勝手知ったる自分の
田舎を選んだと考えるべきであろう。また、土川の文章で
は藤田のことにしか触れられていないが、これも他の作家
の作品を含む話であったのかははっきりしない。しかし、
1945年10月頃よりアメリカ合衆国の戦争省の指示に基
づきGHQにより日本の戦争画が東京都美術館に集められ
た時には、高山から上記の小磯良平、宮本三郎、中村研一
の作品も集められているので、恐らくは高山に保管されて
いた戦争画はみなこの時に東京へ移送されたのであろう。

戦争画をアメリカに送るといふ話は、先にも少し触れた
が、1946年1月にメトロポリタン美術館を会場に企画
されていた「日本征服展」を念頭に置いたものであろう
か。この展覧会に間に合わせるために急いで戦争画を集め
たが、結局間に合わず、それらは1951年まで東京都美
術館に放置され、同年にアメリカに移送され、1970年
に無期限貸与という身分を与えられて東京国立近代美術館
に納められた（詳細は『戦争と美術 1937-1945』
を参照のこと）。本稿の目的は住に関する事なのでこれ
以上戦争画の行方には触れないが、住が戦争画の移動につ
いて大きな役目を果たしていたことがこれまでの内容で確
認できたであろう。

住の戦後—ファッション業界参入

戦後の住の活動に関してはほとんどわかっていない。1
945年は陸軍美術協会の残務処理を行っていたらしいこ
と、戦争画蒐集に携わり、1946年2月にはその目的を
終えたこと、この頃までは世田谷区若林町535に住み、この
時期には藤田の住所も同じであったことが数少ない情報で
ある。

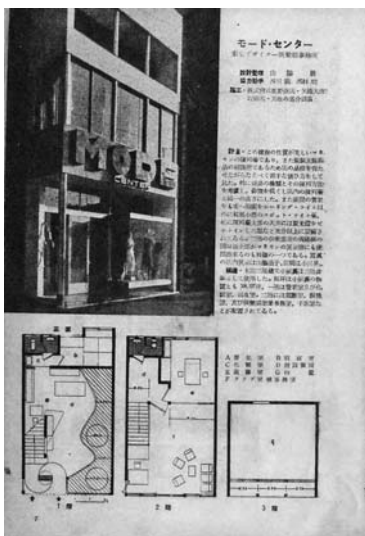
そして（少なくとも筆者にとって）非常に興味深いのは住が戦後にファッション業界に転身したという事実である。どういう縁があったのか、1948年6月頃に新宿区南山伏町16でスタイルニュース社を主宰し、『スタイルニュース』を発行したのである。

『スタイルニュース』は1947年頃に松野憲之助によって編集・発行されていた小新聞である。松野は翌年独立して『ニューススタイルニュース』を発刊するが、1948年末に交通事故で死亡してしまふ（42歳）。1948年1月1日号からは岡田喜三郎が編集・発行を担当し、岩田専太郎のカット、猪熊弦一郎、東郷青児、長谷川春子、斎藤佳三の文章、高澤圭一の連載「デザイン入門」など美術関係者の執筆が紙面を賑わせた。同年の4月1日号では、5月26日に神田共立講堂で開催される「第一回スタイルニュース ファッションコンクール」の告知がなされ、審査員は藤田嗣治（実際には審査せず）、宮本三郎、中原淳一、春山行夫、高澤圭一、マスケートらとされていた。そして6月1日号で、なんと住喜代志が編集・発行を手がけることとなる。『スタイルニュース』（写真1）自体がもともと美術家に近い新聞であり、戦争美術関係では藤田をはじめ



(写真1) 『スタイルニュース』35号
1948年6月1日第1面

め、宮本三郎、岩田専太郎、猪熊弦一郎、長谷川春子、高澤圭一などの作家が関与していることを考えると、当初から住が関係していたのかもしれない。1949年1月1日号では東京・数寄屋橋（日動ビル隣）にモードセンター誕生の記事が掲載され、東京デザイナー・クラブという研究団体の発足も紹介されたが、そのメンバーが宮本三郎、小磯良平、高野三三男、田村孝之介、マスケート、田中千代、桑澤洋子、吉行あぐり、中原淳一、花森安治、高澤圭一、吉田謙吉、山脇巖、河野鷹思、山脇洋三、江口隆哉、建島寛造、長沼孝三ほかとなっていた。ファッション界、



(写真2) モード・センター『建築文化』37 1949年12月より
このセンターの建築は山脇巖が設計監理を行った。

デザイン界や彫刻界の権威に加えて、宮本、小磯、高野、田村という戦争美術で活躍した面々が構成員となっていることは、これも住のコーディネートが背面でなされていたことを想像させる。ちなみに、この3月に藤田嗣治は日本画壇に嫌気がさして渡米することになる。

5月5日号ではモードセンター(写真2)が東京都中央区銀座西5-1に開かれて、七彩マネキン新作によるファッションショーが紹介される。ここでも興味深いのがその内容であるが、衣裳デザインは前述の中原、花森、田中千代、桑澤、小川文子、隅田房子、マスケートらファッション

ヨソ界気鋭の作家達によるものであったのに対して、織物図案は宮本、猪熊、高野、小磯、田村、高澤と全員が陸軍美術協会の有力画家の発表で占められていた。

住は『スタイルニユース』の編集・発行に1949年10月5日号(69号)まで関わっていたことは判明している。それ以後、『スタイルニユース』が発行を続けたのか、住がその後どうしたのか、少なくとも筆者にはわかっていない。

最後の10月5日号には七彩マネキン展が紹介されている。七彩マネキンは島津マネキンから派生した会社で、1947年に第1作目のマネキンを向井良吉が、第2作目は村井次郎が制作している。1948年3月には京都で第1回七彩マネキン新作発表会を開き、1949年の展示会では衣裳デザインに画家なども参加したという。宮本三郎、猪熊弦一郎、中原淳一、田村孝之介、花森安治、田中千代、隅田房子、桑沢洋子、マスケート、宇野千代、宮内裕らであるというが、『スタイルニユース』を飾ったメンバーと多く重なっていることがすぐわかるであろう。この年の7月12日には、その珍妙さで有名となった七彩マネキン

供養祭がこれも陸軍美術協会の主力であった向井潤吉、弟で取締役社長向井良吉らにより実施されている。

終戦後は空前の洋装ブームとなつて服飾関係の学校に入志願者が殺到するようなこともあつたというが、そんな社会状況の中で文化人や美術家が交流しながら服飾文化創造に加わる雰囲気があつたという。殊にマネキン作成には多くの美術作家が携わり、実際にマネキンに関わつた美術家には笠置季男、岡本太郎、東郷青児、堀内正和、末松正樹、高岡徳太郎、遠藤松吉、毛利武士郎など、多数存在した。貧困の中で食い扶持を求めた美術作家が欧米文化を背負つたファッションに活路を見出したと、冷ややかにこのような傾向を見る向きもあるにせよ、美術家たちが積極的
にファッション業界に入り込み、多様な活動と交流を進めていたことを見過ごすことはできないであろう。

『朝日ジャーナル』（1976年3月26日）の記者は「向井といい、毛利といい、戦後美術に画期的な業績を残した彫刻家が、マネキンを真剣に作つたという事実は示唆的である。美術の近代が自律的な自立を追つて純化していく方向とは別の、もう一つの近代化の方向が、そこらあたりにも窺えるからだ。無国籍的なマネキンの容貌や体型の変遷

は、見事なほど日本近代の文化史を象徴しているが、同時にそれが、美術史の恥部をも反証するものといつて、いいすぎではないだろう」と記した。このような見解も純化するばかりの美術を追求するとするならば、わからないでもない。しかし、筆者のように美術を特権的に扱ふ気持ちの薄い人間にとっては、あまりに硬いこのような見方には領けないが、この辺りは本稿の範囲を明らかに超えるので、是非別の機会に触れてみたい話題である。

おわりに

わからないなりに住の活動を追つてみた。勝手ながらも住の人生を分類してみると、東京帝国大学在学中・卒業後のセツルメント時代、その後の朝日新聞時代、そして陸軍美術協会との関わり、戦後のファッション関係というように分けられるかと思う。朝日新聞時代まではどのような人生を送つていたのかは不明であり、本稿でも陸軍美術協会との関わりと、その人脈を活かしてのファッション業界での活動にしか触れることができていない。しかし一人の文化に関わつた人物として、戦中から戦後への人生の転換が非常に興味深く、また筆者の研究分野においても、一つの

時代における美術の動きの中で、ある意味で欠かすことのできないキャラクターとして存在した住のこともっと知りたいという欲求には逆らえない。藤田をはじめとする、有能であり、かつまたクリエイターとしても人物としても個性の光る様々な美術家たちをつなぐ蝶番のような役割を果たした住喜代志という人物に、こなれない形ながらも、わずかばかりの光を当ててみたい、と思つて筆を執つた次第である。